ヴント先生を追悼する

水上藤悦

文学部国際言語文化学科教授　シュテファン・ヴント先生が本年（二〇一三年）三月二六日に膵臓癌のために急逝されました。享年六三歳でした。

先生は一九八〇年の四月に千葉大学の外国人教師として弘前大学人文学部から赴任されて以来、三三年にわたって文学部のドイツ語教育および現代ドイツの文化と社会に関する授業を担当してこられました。あらためて年譜を繰ってみると、かつての人文学部が改組されて現在の文学部が発足したのは一九八一年四月ですから、ヴント先生はまさに文学部誕生以来、学部学生の「国際化」のためにご尽力されてきたことになります。「国際言語文化学科」とはいっても直接ネイティブの教員に外国語を習いながら外国の文化、社会にふれる機会はそう多くはないので、ヴント先生の死は学科のみならず学部にとっても大きな喪失であったといえます。とくに最近は新入生のなかにも大学で外国人教員による外国語の授業を受けてみたいという強い要望が広がりつつあるように感じられるだけにヴント先生の早すぎた突然の死が残念でなりません。

ヴント先生についての個人的な思い出は尽きませんが、ここでは文学部あるいは千葉大学との関わりを中心に

して先生のこれまでのお仕事について記してみたいと思います。八〇年代以後の学部の急激な拡充変化のなかで、教員スタッフもすっかり様変わりし、今ではヴント先生について知る人さえわずかになってしまいました。私が文学部に赴任したのは一九八五年四月ですから、ヴント先生が千葉に来られた頃のことは直接知りませんが、彼にとって文学部が最も文学部らしく、「とても楽しい日々」を過ごすことができたのは、私の知らないこの時期のことであったと思われます。後年の回顧的エッセーの中でも、その頃のことについて「学生たちはよく勉強し、私とドイツ語で話す努力を惜しまず、一人の学生とは、友達になり、ビールを飲みながら、ドイツ語で歓談するまでになりました」と書かれています。私が赴任した頃はすでにそうした雰囲気は消えつつあったのかもしれませんが、それでも定例パーティの他に、学生のコンパや、夏合宿、スキー旅行など何かにつけて学生たちとお酒を飲みながら楽しく歓談する機会は多かったと思います。ヴント先生はつきあいのよい先生でしたので、私はずっと彼は生来お酒の好きな、そして強いドイツ人だと考えていました。ところが亡くなられてから奥様に彼はドイツ人にはめずらしいお酒を飲まない人で、日本の大学に来てお酒を飲む機会が多いのに驚き、ここでは飲まなければやっていけないのだ、と思い定めて千葉でも飲み続けていたようでした、とお伺いして愕然としてしまいました。先生は、その後一時ほとんどアルコール中毒のようになられたことから、お酒を一切断たれ、とくにここ数年は体調を崩されたこともあって文字通り一滴も口にされなかったとの話でした。かつての文学部は今では想像できないほど教員も学生もアルコールに浸かっていたところがありましたが、ある意味で彼はそうしたかつての日本的慣習の犠牲者となっていたのかもしれません。ヴント先生は、ほとんど日本的なまでに周囲に配慮・順応し、一般にドイツ的とされる批判、拒絶という硬い姿勢を示されないめずらしいドイツ人だっ

たと思います。

ヴント先生は「文学部」の専門課程の学生を教育する外国人教師であるという意識を強くもっておられました。しかしその後の改組で「独文学講座」という教員組織はなくなり、一九九四年四月には文学科が現在の日本文学科と国際言語文化学科に分かれ、先生は言語構造論講座という新しい講座に所属するスタッフとなりました。ヴント先生はご自分をドイツ語学の教員とは考えておられなかったので、おそらくご不満もあったかと推測されますが、教授会にも学科会議にも属さない外国人教師という立場もあってか、改組について自ら意見を述べられることはなく、また意見を訊かれることも一切なかったと思います。当時の私には先任のヴント先生のことを考えられるだけの余裕もなかったのですが、今から考えればあの改組によって最も深刻な影響を受けることになったのは彼だったと言えます。先生の授業は「独文学講座」という専門教育を前提としているところがありました。具体的には真剣に「ドイツ語で話す努力」をしなければ乗り越えられない外国語能力の壁がありました。いつの間にか授業から学生たちが消えていくことを不可解にも残念にも思っておられましたが、それは当然の成り行きでした。学生たちは（ドイツ語の学生であっても）もうヴント先生の授業に出なくても卒業できるようになっていました。先生はそれでもそれまでと変わらないより高度の語学力と意欲を要する授業を続けておられましたが、現実に求められる授業は逆に一年生向きの初級レベルの授業であることが多くなりました。私もすでに普遍教育センターで週二コマの初級の授業をもっておられる先生に、さらに文学部の学生のための初級会話の授業をとくにお願いしていました。一人でも多くの学部学生にヴント先生と接する機会をもってもらいたいと考えてい

たからです。それ以上に私が心配したことは、ヴント先生の「外国人教師」という立場がしだいに不安定なものになってしまうことでした。すでに私が赴任した頃からヴント先生と大学との雇用契約の自動継続について問題視する声がありましたが、改組以後はほとんど毎年のように学部長を通して学長との雇用継続の協議がなされるようになりました。学長によっては信じがたいような条件を出されたこともあり、はらはらしたこともありましたが、彼はいつも淡々としたご様子で、少なくともこの件で私はヴント先生から相談を受けたことはありませんでした。幸いなことに歴代学部長の理解をえることができ、文学部では本人の同意を尊重した雇用契約の更新がなされてきました。二〇〇八年に大学本部からの提案があり、当時の学部長からの積極的助言もあって、「外国人教師」という特別なポストを廃止し、一旦それまでの雇用契約を破棄したうえで、ヴント先生を改めて文学部教授として教授会に迎えることになりました。先生の了解を得てこの人事方針を進めた私は、正直長い間の不透明な霧がようやく晴れたかのような安堵感をおぼえました。「外国人教師」という明治以来の特別なポストを廃止することはすでに文科省の基本方針となっていたことでもありました。また先生の教授ポストは本人が退職した時点で消滅することが取り決められていました。ヴント先生の突然の死とともに文学部から「外国人教師」がいなくなってしまったのです。日本の大学から「外国人教師」が消え去っていくことの意味は大きいと思います。文科省は「外国人教師」ポストをもはや先進国日本にはふさわしくない制度として廃止したのかもしれませんが、明らかに「外国人教師」は「外国人教員」とは異なるものです。それは何よりも外国語と外国の文化に疎い日本の学生のための制度でした。

ヴント先生は権威主義的思考とはおよそ無縁な人でした。そのために彼はあまり「ドイツ人らしくない」ドイツ人として誤解されてしまったところさえあるのかもしれません。およそ自分を強く押し出すことの苦手な彼は、典型的なドイツ人、「偉い」ドイツ人とされることをむしろ意識して避けていたように思われます。多くの「ドイツ人教師」がこれまでドイツの文化と学問の偉大さについて語ってきたとすれば、彼が好んで語ったのはむしろふつうのドイツ人のあまり偉くはない生き方でした。私が原発や環境問題、社会福祉政策などでドイツのすばらしさを称えると、よく「いやいやドイツでも実はこういうことが……」というのがいかにも彼らしい応答の仕方でした。ドイツといえば今でもたいていの学生はヒトラーとホロコーストで、私も授業で何度かそうしたテーマを取り上げましたが、あるとき彼に「どうして日本人はこうもホロコーストが好きなのだろう」、という言い方をされて、内心忸怩たる思いをしたこともありました。現代のドイツにはもっと語るべきたくさんの重要な問題あるのに、と言われているような気がしたからで、考えてみれば、戦前のドイツ文学を研究してきた私が、今のドイツの社会、それもふつうのドイツ人のふつうの生活について知ることはごくわずかで表面的なことでしかありません。そういう意味でも彼との雑談は私にとってはいつも「啓蒙的で」（蒙を啓いてくれるという意味で）、ありがたいものでした。ヴント先生は「心理学」という近代的学問の創始者の一人として世界的に知られたヴィルヘルム・ヴントの家系の末裔でしたが、そうしたことをとくにご自分から口にされることはありませんでした。おそらく依頼されて、京都大学主催の「日本心理学会」で一度だけヴィルヘルム・ヴントの知られざる業績と日本との関係について正面から論じておられますが、やはり家系に属すものでなければ書けない内容のある、きわめて興味深い講演だと思います。ときにいかにも彼らしいユーモアを感じさせる講演ですが、その

なかでヴント教授が実験装置を扱うのが下手ですべて助手に任せていたことにふれて、自分が彼から受け継いだのはその不器用さだけだと述べています。確かに彼は機器が苦手で、大学の高度情報化とＰＣトラブルに悩まされ続けていました。五万ページにのぼる著作をしたとされる偉大なヴント教授は世界中の民族の文化と心理に関心をもっていたようです。ヴント先生の人文教養の深さ、世界を見る視野の広さ、そして異文化に対する好奇心の強さと開かれた態度にはやはり「血筋」を感じさせるものがあったと思います。

ヴント先生はドイツ文学の研究者ではありませんでした。しかしドイツ文学についての彼の「素養」はやはり日本人研究者にはみられない広さ、質の高さをもっていました。ドイツ文学を論じた数少ない論文にもそうした「文学教養」に裏付けられた独特な視点と読み方がきちんと示されています。ドイツ文学で彼の好みの作家は文学史ではあまり「偉大な作家」としては取り上げられないヴィルヘルム・ブッシュとかヴィルヘルム・ラーベのような作家でした。『人文研究』に載せた『ヴィルヘルム・ラーベの小説について』は、日本ではほとんど知られていない、また一般には読まれてもいないと思われる後者の作家を取り上げたものです。私自身もこの作家の作品はほとんど知らないので、内容に立ち入ったことは書けませんが、その作家について彼は「ヴィルヘルム・ラーベはドイツの作家の中で最も典型的なドイツの作家の一人である」と書き起こしています。ドイツ文学には「変わり者」(Sonderling) という伝統的な人物像があります。彼は結論部でドイツ文学における「変わり者」の「文学史的連関と位置」について論じています。ラーベが「フモール」をもって描いた「変わり者」には、一九世紀後半のドイツにおける資本主義の飛躍的な発展のなかで自らの内面的世界を保持しようとした小市民たち

の奇妙な生き方が表現されています。論文からは明らかに彼が十九世紀ドイツの急激な近代化が生み出した独特な人物類型に深い歴史的洞察と共感をもっておられることが伝わってきます。ヴント先生の独特な人柄を私なりにあえて一言で言い表せば「フモール」の人ということになります。ドイツ語の「フモール（Humor）」は、英語の社交的な「ユーモア」とは違った静かなあきらめに似た感覚が感じられますが、彼が時折もらすさりげない言葉にはよく独特な「フモール」が感じられることがありました。辞典的な定義にそった言い方をすれば、「フモール」には小市民の生き方の愚かさ、馬鹿馬鹿しさ、弱さに対する深い洞察と共感があると言えます。彼は日本人の「愚かさ」を批判するよりは、はるかにそれをいっしょに楽しむことの好きな人ではなかったかと思います。強く偉い人間よりはむしろ少しおかしなところのある弱い人間を好んでいたように思います。彼は学生の話を聞くのが好きな「外国人教師」でした。どこでどう聞き知るのかわかりませんが、授業に来ている学生のことでも意外に私よりもいろいろなことをよく知っていました。他学部、他学科、院生そして留学生であっても、研究室に訪ねてくる学生は親しく話を聞いていましたが、概して彼は少し変わったところのある学生が好きな先生でした。なかには私から見て心配になる、問題をかかえた学生もいましたが、彼は話をしたがる学生を追い返すようなことはせずに時間が許せば丁寧に話をきいていたように思います。彼のそうした姿勢については、彼自身から打ち明けられた笑い話をよく思い出します。海外から戻って成田から電車に乗ったヴント先生はまもなく中年の日本人に英語で話かけられました。外国人なのでそういうことはよくあることのようでしたが（ちなみに日本人はなぜ外国人は英語が通じる人と思うのだろうというのが彼の日頃の嘆きでした）、英会話の相手にさせられて話を聞いていると、その人は東京までずっとひとりで話していたようです。彼が私に告白したことは「ぼく

にはほんとうは彼が何を話しているのか全くわからなかった」ということでしたが、私が感心したのは、にも関わらずそうした日本人の英語を遮ることもなく東京まで聞き続けたヴント先生の姿勢でした。

私は学部の授業では彼といっしょに（正確には彼に助けられて）「ドイツ語作文」の授業を担当していました。正解のある和文独訳ではなく、自分の考えを外国語で伝えようとする外国語作文はほんとうのところはネイティヴでなければわからないことが多いので、ヴント先生のように日本語にも堪能な「外国語教師」といっしょに授業ができたことは本当にありがたいことでした。（彼は日本語の他に英語とロシア語にも通じていました。）学生はとかく文法知識と和独の辞書があれば独文は作れるもの考えがちですが、それだけでは外国語にはならないことをまずわかってもらう必要があります。そのためにはやはりネイティヴの先生がいて、自分の作文をみてもらうのが学生には一番わかりやすいと思います。授業では文法などの初歩的誤りなどは私が直しますが、そのあとで先生には「文法的に間違いはないけどそういうドイツ語はない」、「理解できるけどいかにも不自然」、「古い文語で今は使われない」、「表現の用法がおかしい」といったようなコメントをもらいながら、外国語は一方的に発信するだけではだめで、相手に正しく伝わる必要があるものであることを理解してもらうようにしていました。彼はむずかしいドイツ語が嫌いで、「もっと単純でわかりやすい言葉で」とくり返し注意していました。表面はドイツ語でも中身は全くの日本語という通じない作文も少なくないのですが、時には私にも全く理解できないドイツ語が出てきて戸惑ってしまうこともありました。そんな時によく、いやこの学生の言おうとしていることはたぶんこうだよ、と助け舟を出してくれるのもヴント先生でした。長年の学生の経験もあってか、彼には日本人

が陥りやすい間違い方までよく心得ているところがありました。作文でも彼は単なる語学演習、作文演習のようなことは好まなかったのではないかと思います。彼の演習は語法や表現を教え込むというのではなく、ともかく何かを言おうとする学生を助けようとすることでした。当然のことかもしれませんが、彼にとってドイツ語は常に生きた現実の一部でした。たとえば彼は学生が、ごくふつうに「私たち日本人は……」というようなドイツ語を書きだすと、「その私たちという言葉は注意したほうがいい、少なくとも戦後のドイツではあまり使わなくなっているから」というようなおよそ語学的ではないコメントもよくしました。たしかに日本人にとっては「私たち」はいまなお自明さを保っているところがありますが、ドイツ人の「私たち」はもはやそのような自明さをもっていないのです。先生にはまた学生の卒業論文の独文レジュメの添削をお願いしていました。国際言語文化学科では卒業論文は英語圏では英語で書き、それ以外の外国文化のテーマの場合はその外国語によるレジュメをつけることになっています。学生の語学力の低下はこの外国語レジュメによく表れていて、最近では初歩的な文章をなんとか一枚かけるだけという学生も増えてきました。ドイツ語についていえば、長い間なんとかそのレジュメのドイツ語としての質を支えてくれていたのはヴント先生でした。学生はヴント先生がいたからこそドイツ語レジュメを真剣に書こう努力するところがありました。レジュメは卒論の最後に書くことがふつうなので、学生にはできるだけ早めに相談に行くように指導していても、書く時期はたいてい提出期限の直前になってしまいます。彼はそんな時でも学生の要望に応えて文字通り土日を返上して大学に出てきて、持ち込まれた作文を学生の書こうとしたことを丁寧に確認しながら時間をかけて添削してくれました。それも義務感からというよりはむしろ、学生たちと書かれたドイツ語について話をするのを楽しんでいるところさえあったと思います。

学生に限らず、私自身もふくめて、ドイツ語の証明書、ドイツ語作文でヴント先生のお世話になった人は学部の内外で少なくないのではないかと思います。そうしたいわば大学の「外国人教師」に結び付けられた仕事を彼はたいてい快く引き受けていましたが、他にご自分の中心的な社会的活動としては日本文学の翻訳という仕事をされていました。彼の翻訳で太宰治と筒井康隆の作品は単行本でドイツの出版社から出版されています。彼が翻訳の対象にした日本の作家たちにも、ふつうとは変わったヴント先生独特の着眼、個人的な興味が反映しているように思われます。太宰治、堀辰雄、中島敦といった作家たちです。太宰治と堀辰雄は弘前と軽井沢でそれぞれ個人的な出会いがあったようです。中島敦についてはドイツ語読本教科書を日本人ゲルマニストと共同で制作していますが、この知られざる多言語多文化的な教養をもつ稀有な作家をドイツに紹介してみたいという「職業的野心」も働いていたのかもしれません。彼の文字通り遺作となってしまった最後の翻訳は、植民地朝鮮の生活風景を描いた中島敦の短編作品でした。最後の翻訳原稿は入院前にでき上っていたようでしたが、校正は入院病棟での仕事になってしまいました。訳出されたのは三つの短編ですが、ヴント先生はさらに翻訳を続けて、大日本帝国時代の植民地朝鮮、すなわち日本の「外地」、かつてのもう一つの日本の多民族多言語の現実を描く中島敦の短編集を編んでみようとする全体構想をもっていたように思われます。

ヴント先生は私の予断、偏見もあるかもしれませんが、思いもよらない意外な面があって何かと驚かされることの多いドイツ人でした。彼はいろいろなことに関心と知識をもっていても、自分からその教養知識を広げるタイプではありませんでした。しかし決してそれを避けていたというのではなく、むしろ適当に水を向ければ話が

尽きないというところがありました。とくに授業などで学生の方から興味を示されると、しばしば話がそれたまま止まらなくなることもあるほどでした。彼は自分の私生活について話をすることはあまりありませんでした。彼の千葉での私生活で私が知る限り最大の出来事は四〇代半ばで、当時千葉大大学院で英文学を学ばれていた奥様と結婚されたことでした。ご結婚の経緯などについて私は何も知らないのですが、明るく聡明な伴侶とお嬢さんを一挙に獲得された離れ業には大変驚かされました。楽しそうに羽織袴を着ている結婚式の姿が印象的で、孤独の影が吹き払われた新しい生活を心から祝福しました。趣味も多様だったかと思いますが、例えばサッカーについては、ふつうのドイツ人らしく相当に詳しい知識と見る目をもっていました。（ただ、それを授業のテーマにするようなことはなかったようです。）スポーツでは駅伝やマラソンが大好きでこれこそ日本のスポーツといわんばかりによく熱中して観戦していたと思います。休暇中にはタイなど東南アジアにもよく旅行されていたためか近隣アジアのこともまた驚くほどよくご存じでした。すっかり昔の話になりますが、かつてはよく学生のコンパがあり、カラオケにも行くことがありました。そんな時彼が、低い声を震わせ、こぶしをきかせて歌う「演歌」はみごとなもので、学生たちの大喝采を浴びていました。かつてはまた学生たちといっしょにスキー旅行にもいきましたが、彼が好きなのは直滑降で、転倒をものともせずものすごいスピードで山上から直滑降するのを楽しんでいたのを思い出します。奥様の話では、地域の市民マラソンにもよく参加されて、珍しがられて表彰を受けたり、逆に最後尾を走り続けて無念にも途中で大会関係者に制止されたりしたこともあったようです。

しかしそうした元気なヴント先生の姿からは想像もできないほどここ数年は体調を崩されることが多く、突然

倒れられたり、手術を受けたり、入院したりすることが多くなっていました。彼には長年親しくしていた日本に住むドイツ人の友人もいましたが、奥様の話ではここ数年でそうした親しい人々が次々に亡くなられたことも重なり、彼の私的生活が急に寂しくなっていたようでした。ドイツ人らしい几帳面さで教授昇任後は、学科会議、教授会に体調が許す限りきちんと出席するようにしていましたが、おそらく（日本語ではなく）議事内容のほとんどは理解できなかったと思います。私は適当にとは言っていましたが、皮肉なことにいままではなかったそうしたことも彼にとっては精神的負担になっていたように思われます。健康状態の変化もあってか、彼にはとりわけ週二コマの九〇人もの学生を相手にする普遍ドイツ語の授業が相当に負担に感じられるようになっていました。あまり授業について不満を漏らすことのない彼が、「この授業には意味がない」とこぼすようになっていました。誤解のないようにいえば、彼は決して普遍教育そのものを嫌っていたわけではなかったと思います。ドイツ語を学習する強い意欲のある学生ならばどこの学生でも喜んで教えるというのが彼の一貫した姿勢でした。実際、普遍教育のクラスでも時には楽しみにしてでかけた時もありました。他学部の学生でもドイツ語を熱心に学ぼうとする「面白い」、優秀な学生はいるからです。しかし少なくともここ数年彼が普遍教育で担当していたのは大教室で顔の見えない学生たちを相手に初級文法を教え、なんとか出席を管理して単位を出す授業でした。彼が足をひきずりながら時間をかけて授業に向かう姿がしだいに不安を感じさせることが多くなっていましたが、とくに三・一一の大震災以後はストレス障害、鬱病などの悪化も加わり、精神的、肉体的に追い詰められた苦しい日々が続いていました。しかしそれも何とか乗り切ることができ、本年度から気分を一新して再出発を期して新学期から授業を再開したばかりでした。昨年の九月末、後期の準備を進めていた矢先、奥様から突然の電話で

先生の御病気を告げられた時には、まさに青天の霹靂で本当にそんなことがありうるのかという思いを抑えられませんでした。

後で入院された病院が大学病院だったこともあって、大学への行き返りに何度か先生を見舞うことができ、長い休みの後でひさしぶりにお話をする機会を持つことができました。手術後の回復は必ずしも順調とはいえなかったのかもしれませんが、たまたま私が見舞うことができた日は幸いご容態の安定していた日が多く、比較的お元気な様子で、それまでと変わらない「雑談」をして帰ってきました。病室で彼は漢字に興味をもっていました。漢字を新たに学び直してみたいという気持ちをもっていたようです。これも驚かされたことのひとつですが、ヴント先生はドイツ人らしいきちんとした記憶力をもっていた人だったと思います。私はあいまいな記憶が多いのですが、あれは一九九〇年のことだったという言い方がふつうにできました。あるとき本人に確かめてみると、いつもの調子で、いや最近は衰えた、昔は聞くだけで電話番号をおぼえられた時もあったのに、と言われてまた驚いたことがありました。そうした彼だったので入院して手術を受けてから、自分の記憶力の衰えに不安を感じるところがあったのかもしれません。私が受け継いだ授業のことも気にかけていて、学生のことについても話をしました。彼が最後に教えたクラスの学生との関係がとてもよかったためか、自然にそうした熱心な学生たちを相手に授業することを思い浮かべて楽しみにしているところさえありました。長い間、彼は、ドイツ語はもう不要だという類の発言を繰り返し聞かされ、実際にドイツ語を真剣に学ぼうとする学生が少なくなり、また学生の語学能力の低下も避けられませんでした。私自身そうした現実に対して何もできなかったことを、彼に対

してただ申し訳なく思うばかりです。彼が千葉大学で過ごした三〇年間は「国際化」の掛け声とは裏腹に、大学での語学教育が削減され衰退してしまった時代であったと言えます。そうした時期にヴント先生とともに、そしてヴント先生のおかげで、少しでも本来の文学部らしいドイツ語の授業をもてたことは私にとって本当にありがたいことでした。彼にとって日本の大学改革の奇妙な現実はとうてい理解しがたいものでした。しかしある意味で彼にとって日本は、初めから理解しがたい、不思議なところの多い異国であったともいえるのかもしれません。日本の生活を心から愛し、親しんでいたヴント先生は、そうした現実を批判するよりはむしろ、どこか奇妙でおかしなところのある生活を楽しんでいたように思います。少なくとも私は日本がヴント先生にとって、そのおかしな現実、不思議な滑稽さもふくめて十分に楽しい面白い国であったことを心から願っています。

シュテファン・ヴント教授略年譜

一九四九年四月二四日　ドイツ、マンハイムに生まれる。
一九六九年―一九七六年　チュービンゲン大学、マンハイム大学、キール大学、マールブルク大学でスラブ学、歴史学、教育学専攻
一九七六年三月　マールブルク大学文学歴史修士号（MA）取得
一九七六年四月―一九八〇年三月　弘前大学人文学部外国人教師
一九八〇年四月　千葉大学人文学部外国人教師
一九八一年四月　千葉大学文学部文学科外国人教師
一九九四年四月　千葉大学文学部国際言語文化学科外国人教師
二〇〇九年四月　千葉大学文学部国際言語文化学科教授
二〇一三年三月二六日　逝去

主要業績

著書　論文

Didaktische Probleme des Geschichtsunterrichts in den sozialistischen Ländern am Beispiel der UdSSR.
城西大学『人文研究』第十一巻、一九八四年、五三頁―七三頁。

Das Erziehungssystem in Indonesien und die Ausbildung naturwissenschaftlicher Lehrer. Chemical Department IKP Surabaya, 1985.（共著）

Die kommunistische Erziehung und ihre Wertvorstellungen. 城西大学『人文研究』第一二巻、一九八五年、一五三頁―一六六頁。

The Influence of Mythology upon European Literature. 千葉大学『人文研究』十六号、一九八七年、一二九頁―一四九頁。

「ドストエフスキーの小説に於ける思想上の傾向」城西大学『人文研究』第十六巻、一九八八年、四七頁―六四頁。

「西ベルリンと国際関係」城西大学『人文研究』第十七巻、一九八九年、三三ページ―五三頁。

「W. ラーベの小説」千葉大学『人文研究』一九号、一九九〇年、一二七頁―一四四頁。

「ドイツ民主共和国に於ける拒否的教養小説の影響力 ―“Es geht seinen Gang oder Mühen in unserer Ebene”の成立とその後」城西大学『人文研究』第十八巻、一九九一年、八七頁―一〇六頁。

Dazai Osamu ― Biographie und Fiktion. 千葉大学『人文研究』二十一号、一九九二年、二三五頁―二五〇頁。

「南ドイツのカーニバル」『祭りのディスクール』（多賀出版）所収、一六〇頁―一七三頁、一九九三年。

「ドイツ文学に於けるオリエント」『幻想のディスクール』（多賀出版）所収、五〇六頁―五二〇頁、一九九四年。

「南インドの書店事情」『世界の古書店』（丸善ライブラリー）、一九九五年、一二頁―二一頁。

「ドイツとヨーロッパの将来?」『日独文化研究』（芸林書房）第三号、一九九六年、一三一頁―一四八頁。
Ein neuer "Historikerstreit" oder ein "Sommerloch" — Goldhagen und die Deutschen.『日独文化研究』（芸林書房）第四号、一九九七年、一一三頁―一三六頁。
Wilhelm Wundt's Influence on Japanese Psychology. 千葉大学『人文研究』二九号、二〇〇〇年、三九七頁―四一一頁。
「高崎からライプチッヒへ」『心理学史・心理学論』第三号、二〇〇一年、四一頁―四四頁。
Historical Development of Sexual Moral and the Conception of Family and Marriage. In: Environment in Natural Socio-Cultural Context.（稲穂書房）二〇〇三年。
Ein Japaner in Leibzig. 千葉大学『人文研究』三二号、二〇〇三年、四三九頁―四五〇頁。

翻訳

Osamu Dazai: Das Gemeine und andere Erzählungen. München: Iudicium Verlag, 1992.
Wind. 千葉大学『人文研究』二五号、一九九六年、三四一頁―四〇九頁。
Essays über Shinano. 早稲田大学政経学部『教養諸学研究』一〇六号、一九九九年、一七九頁―一九八頁。
Wege in Yamato. 千葉大学『人文研究』二八号、一九九九年、二六七頁―二九六頁。
Tasuo Horis Jugenderinnerungen und seine Essays über Yamato. 千葉大学『人文研究』三一号、二〇〇二年。
Der Tiger im Mondlicht und andere Erzählungen. 国際語学社、二〇〇〇年。

Das Spätwerk von Osamu Dazai. Übersetzung von “Also sprach Buddha” mit Einleitung und Nachwort. 千葉大学『人文研究』三九号、二〇一〇年、九五頁―一三八頁。

Yasutaka Tsutsui: Professor Tadano an der philosophischen Fakultät. Hamburg: Alsterverlag, 2011.

Literatur über das “Außenland” des Großjapanischen Kaiserreiches am Beispiel von Atsushi Nakajima. 千葉大学『人文研究』四〇号、二〇一一年、一五七頁―一八七頁。

Literatur über das “Außenland” des Großjapanischen Kaiserreiches am Beispiel von Atsushi Nakajimas Erzählungen　千葉大学『人文研究』四二号、二〇一三年、一六九頁―二〇三頁。

書評、口頭発表、その他

Besprechung: “Japans Postmoderne Konzerne” Iudidium Verlag, München 1996. 千葉大学『人文研究』二七号、一九九八年、二〇一頁―二一二頁。

Dazai Osamu, a Japanese Auther. Warwick University, Symposium about Japanese Cultute by Representatives of Chiba University. April 1991.

「アレマン地方とシュヴァーベン地方のカーニヴァル」千葉大学ヨーロッパフォーラム、一九九二年　二月。

The Beginning of Dutch Science. Warwick University, Symposium about Japanese Culture by Represetatives of Chiba University, September 1992.

Shito-ism. The Third Warwick – Chiba Symposium. July 1993.

The Japanese Language. The Fourth Warwick — Chiba Symposium. September 1994.
「国際都市千葉」千葉大学公開講座「イメージによって読み解く都市」一九九四年六月二五日。
Wilhelm Wundt's life, work and his influence in foreign countries. Basic Mechanism of Language and Language Disorder. Leibzig. September 26–30, 1999.
「日本の心理学におけるウィルヘルム・ヴントの影響」日本心理学会第六四回大会、京都、二〇〇〇年一一月。
「ドイツの福祉制度」浦和大学社会学シンポジウム、二〇〇六年六月。
「ヴントさんのティータイム雑談」（エッセーシリーズ）『月刊千葉』一九九一年三月―一九九二年一〇月。

教科書

Volksstimme, Gottesstimme（共著）同学社、一九八四年。
Der Meister（共著）大学書林、一九九一年。
Wir lernen nicht für die Schule, sondern für das Leben（共著）第三書房、一九九一年。
Der Frühlingsvogel（共著）大学書林、一九九二年。
Die Anfänge der holländischen Wissenschaften（共著）朝日出版社、一九九三年。
Deutsche Grammatik für alle Fälle（共著）朝日出版社、二〇〇〇年。
Der Eisenofen「グリム童話で学ぶドイツ語」（共著）郁文堂、二〇〇二年。
『まずはこれだけドイツ語』（共著）、国際語学社、二〇〇二年。

Hans mein Igel「グリム童話で学ぶドイツ語2」（共著）郁文堂、二〇〇七年。